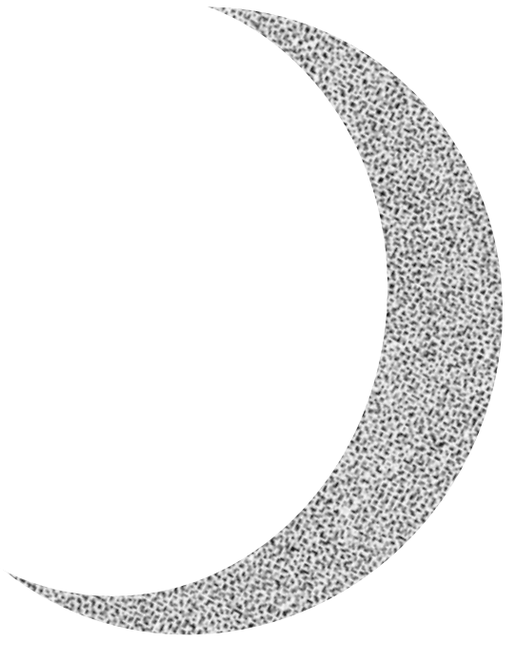
月　刊

Mélange

Vol.159



2021.2.28

詩と評論

月刊「Mélange」
Vol.159.2021.2.28
「月刊めらんじゅ」編集部

「月刊めらんじゅ」159号　目次

詩・俳句

小さな橋を渡る　……にしもとめぐみ　4
なまえ　……安西佐有理　4
雨男／ガラス窓　……黒田ナオ　5
ハート ……高谷和幸　7
雨電柱……中嶋康雄　8
月のざれごと……大橋愛由等　9
巨人の食卓 ……野口裕　10
崩壊ソネット　……大西隆志　11
商売　詠（俳句）　……岩脇リーベル豊美　12

評論

連載２回目／「想像力の彼方」②……大西隆志　3

連載小説

２回目／「海猫堂店仕舞記」……千田草介　13
２回目／「海の見える丘」……高木敏克　14

連載エッセイ

「アメリカ南部に暮らして」……モス堀渕敬子　6
益田っこ通信56号「あなたは良い人でなくてもよい」……元正章　12
神戸詞（うた）あしび147 セルベトと尹東柱をむすぶ〈贖罪の碑〉……大橋愛由等　16

編集部だより★80／2月は緊急事態宣言下で暮らすことになった。わたしが住む兵庫県は近隣の大阪府、京都府とともに宣言の対象となっているが、その「周辺地域」も同宣言と似たような自粛を実施しているようだ。鹿児島県でも同じような自粛要請が出されていて、奄美群島の夜の飲食街はやはり人出が減っていると聞く。／新型コロナウィルスへのワクチンの接種がようやく医療関係者を中心に始まった。日本列島民の四分の一をしめる高齢者の接種は４月以降、一般国民はそれよりもおそく5〜6月以降となるだろう。その間にもコロナ変種が広まっているので、あらたな不安が発生している。わたしの周辺にコロナ感染を極度に恐れているのは、持病を持っているひとや、毎日かかさずテレビニュースをチェックしているひとたちである。テレビメディアは視聴率の必要性から、手を変え品を変えコロナ危機を報道している。そしてコロナ以後の新生活様式に踏み出している少しの兆候も見逃さず報道の対象としているので、それを見ている視聴者は、すっかり洗脳されてしまっている。これは無意識下で進む現象であり、言ってみれば「自粛警察」の正義感を暗に助長しているのもマスコミという装置なのかもしれない。／われわれ詩の会は、三密をさけながらも粛々と会を続けている。一方、わたしの友人たちが大阪で催している俳句の会は、リアルに集まることを避け、ネット上の句会としていることを見ると、感染者の多い大阪と兵庫の差異もみえてくる。／2月の「Mélange」例会における読書会は、野口裕氏が担当。鈴木六林男と林田紀音夫という二人の俳人がともに東洋一の規模を誇った吹田操車場（大阪）に関する俳句をつくっていて、それを紹介することで二人の作品世界の根幹にせまる。（大橋愛由等）

大西隆志　想像力の彼方に〈2〉

電車に揺られて少し遠い場所に行くのは好きだ。もちろん目的があったとしても、早く行くことがない場合は、出来るだけ各駅停車で、としている。ドアが開くたびに、その土地の持っている気性や気質のようなものが入り込んでくる。潮の匂いだったら海が近いとか、煤煙の臭いが流れてきたら製鉄所の近くだとか、それは僕の日常の行動のなかでは埒外でもあるが、何時もそれらが日常である人だったら鬱陶しいことかもしれない。それが苦痛の場合だってある。

かつて洪水被害のある土地に行った時に感じた自身の視線の違和感、それは他者から見たら冷たいのではないか、と怪訝に思われはしないかとも感じた。現実の厳しさを背負った日々の営みに、対比するように水の力で捻れ曲がったレールがあり、確かに洪水の酷さを体感させてくれるが、災厄に見舞われた被災者が感じている視線の光景とは異なった不思議な世界に魅せられた。しばらくの間だったが、田圃に流されたアスファルト道の一部とともに眺めていた。行方不明者のいる場所の近くで不謹慎だ、と感じてはいたが廃墟の美というか、洪水で流された何もない原初の土地をイメージしていた。非日常が侵食するように、当事者ではないからなのか、僕は日常の枠外に踏み入れているだけの頼りない存在なのかもしれない。旅とはそのことを明確にしての態度のように思っている。

僕は旅とはいえない日常と非日常の境界線上で、ふらっとスリッパで出かけて行く、が理想的としている。ある種の気楽さを担保にしているのかもしれない。散歩の延長線上に「あらわれてくる」、本当は顕れてと書きたいのだが、詩を作るときの出現する言葉や、イメージとは顕われてくるに近い。想像力の欠片もない眼差しを向けていながら、皮膚に感じる日差しの強さや吹き抜けていく風は、リアルに僕の「いま、ここ」を知らせてくれたから、あらためて想像力の尻尾をつかまえることができたように感じた。

想像力はヘンリー・デイヴィッド・ソローの言葉にあるように、観念の靄の中にあるのではなく、世界の実相を見届けることから出発しなければならない、が響いてくる。現実を常識的に捉えるだけでは、主観的に認識したある種の普遍性や必然性のあり方が実相に届いていかないように思っている。スニーカーを履いて、ドアに鍵をかけて外へ、そして歩き始めるか。コロナ禍下ではなかなかかなわない事態になっているのだが、距離を取ってしまっては暮らしの中に入っていけない。想像力について、本の森からヒントをもらうことにする。

いま手元にある本を娘の部屋を占拠した中から拾い出し、ボブ・ディランの「モダン・タイムズ」を聴きながら探し出した中に、昭和46年に出た安西均著の『やさしい詩学ー詩をよむために 書くために』が出てきた。現代教養文庫の一冊。詩を読んだり、書いたりすることがポピュラーでない時代だが、この本に寄せてと本文に入る前に鮎川信夫の文章が載っていて、「詩は人間の想像力の産物といわれますが」とあり、ちょっぴり感動しました。

イギリスの詩人キャスリン・レインの言葉を引いて、想像力の産物が詩であると。この本について蛇足になりますが、安西さんが連載された文章は「野火の会」の機関誌に書かれた。「生活と詩を結ぶ」をモットーにした詩を書いたり読んだりする高田敏子さんの主宰の詩雑誌です。50年ほど前のことです。僕がまだ高校生で、男ばかりの工業高校でテニス部といかがわしい文芸部を掛け持ちながら下手な詩を書き、「赤と黒」を中心にした大正時代の詩について文化祭で発表したり、フォークソングにはまっていた時代です。不思議と文芸の詩と歌の詩は共存していなかった。今になってこの本を読み返しながら、詩の大衆性というか、多くの人に届いていく言葉があったことに驚いた。

当時の僕は「赤と黒」のアナーキーな詩人に憧れていたこともあり、高校を卒業して地元の市役所に就職し、「赤と黒」の詩人であった小野十三郎さんが校長の大阪文学学校に入った。話がガラガラ蛇のごとくでもあるが、「想像力」が定点観測のワードでもあり、本棚から小野さんの名著『詩論＋続詩論＋想像力』（思潮社）を引っ張りだした。何回も読んでいるのに、またもやショックを受けることになった。箴言のような章を立てていない「想像力」に、僕が考えていたことと共鳴してしまった。小野さんとは少しだけ考えていることは違ってはいるが、あらためて稿を起こしたいと願っている。

詩人の想像力もだが、読者の想像力の作用、との箇所に惹かれていた。「眼前にある物や、日常次元にある平凡な実感に、積極的な詩の力をあたえ、それを変質させてしまう場合があることを認めなければならない。それと同時に、またこの関係が逆になっているときのことも考えることができる。すなわち、一見、豊富そうな想像力と、多彩なイメージによって構築されているように見える作品が、これも読者に想像力があるために、そのはたらきによって、内質は日常次元の平凡な生活感情の表現にすぎないことを、たちどころに看破されている場合もある」と。

詩人の持っている想像力も、いついかなる事態においても、生活をひきずっていることの意味を、詩人の必然の経験の背後にある言語の意識下の質によることは注意しなければならない。実相との邂逅ではないか、または人の心の内に光を待つような存在なのかもしれない。

やっかいなことはないのだ。詩を書いてみることの面白さは、アメリカの思想家ウィリアム・ジェイムズの特徴でもあるプラグマティズムの「例外を愛する精神」からの実相へのヴィジョンと繋がる。それは詩人のあり方を語っているのではなく、誰もが心に秘めている詩的感動の継続であり、判断停止を引き込まない言葉の豊かさではないのか。いくら面倒なことであっても、一人一人の自立した個人の言葉の担い手でもある、詩を書き、詩を読み、詩的な顕われに接していくだろう、あなたでもあり、僕でもあるのだ。

◆小さな橋を渡る

にしもとめぐみ

かけがえのない時間を
さえぎるのは
交通障害に天変地異

細い水の流れさえ
橋が架かっていなければ
渡れない

あなたの俤に
包まれて微睡む
時を超えていく想い

宝玉のような時間を
つなげた首飾りを
あなたに　かけよう

◆なまえ

安西佐有理

ひとの　なまえ
どうぶつの　なまえはなの　なまえ
ちかい　とおい
くにの　なまえ
えだを　おられた

つみきと　にんぎょうの
ぎんがの　なかで
なまえだった　ことばを
いくつ　ならべていく
よびごえは　しおれ

それは　だれの　ことば
いつを　いきた　ことば

なまえだった　あなたは
はるかな　ほしを　すくいとり
ふゆの　くらい　つちに　うずめた
いまだ　なづけられない
かぜの　ひそかな　よびなと　ともに

たしかに　あなたの　ことば
あなたの　ときを　いきた　ことばで
なまえたちを
めばえたばかりの
ひかりに　かえて

◆雨男

黒田ナオ

ダムの底にひとつの村が沈んでいるように
わたしの胸の奥にも
ひとつの町が
静かに横たわっている

町には、いま
雨が降り始めたようだ

うんざりした顔で
空を見上げながら
男が傘をひろげている

◆ガラス窓

黒田ナオ

突然、消えてしまった
わたしが消えてしまった

雨が降っている

雨男に会いに出かけたまま
どこかへ行ってしまった、わたし

ここに残されているのは
いったい誰なんだろう

夜中にひとり、お皿を洗っている
この女は

〈アメリカ南部に暮らして①〉 ―モス堀渕敬子

私は1989年5月に、結婚のため夫の故郷であるアメリカ・ノースカロライナ州に移り、そこに23年間住んでいました。

ノースカロライナ州は東海岸にあり、ニューヨーク州とフロリダ州の間にある自然豊かな温暖な地域で、建国13州の一つであり、アメリカでも歴史のあるところです。

州都はRaleighです。カタカナではローリーと書かれてありますが、現地の人の発音はラレイが近いです。最大の都市はこの州都ではなく、シャーロットです。ノースカロライナは人口が分散して、いわゆる大都市はありません。

私たちはノースカロライナ中部にあるヒッコリーという街に主に住んでいました。そこは家具の製造・販売が盛んなところです。

南北戦争（1861-1865）のとき、ノースカロライナは南軍として戦っていました。

日本人は太平洋戦争に負けて自信もプライドも失ってしまったけれど、彼らは南部人としての誇りを失っていません。ここでは北部人は、Damn Yankee(くそったれヤンキー)と言って嫌われています。

かつて一人の日本人ビジネスマンが南部を旅行した際、とある老人から言われたそうです。

「わしら南部人は日本人の気持ちがよくわかるよ。日本人も南部人もヤンキーと戦争して負けたからのう」って。(もちろん義父のように日本軍と戦った南部人もいますが……)

鹿児島県とジョージア州は1966年に姉妹盟約を結びました。両県州は多くの類似点があるからなのです。かたや西南戦争、かたや南北戦争という内戦で敗れているのです。

私は大阪生まれなので東京に対してライバル心はあります。でも、北部に対する南部人のライバル意識はすごいです。

1999年のワールドシリーズ（野球）は、ニューヨークヤンキース対アトランタブレーブスで大いに盛り上がりました。

南北戦争はまだ続いています。

私たちがアメリカを引き払って日本に住むことを母に言うと、「敬子、あんたはアメリカに留まったほうがええんとちゃうか。日本は敗戦国やで」と言われびっくりしたのです。母はまだ敗戦のショックを引きずっているのかもしれません。

◆ハート

高谷和幸

生得的能力について疑ってはいけない。しかし、それがアプリオリに備わった能力であると表現を変えるのは根本的な問題をすり替えることの顰蹙を免れえない。本来ある生命の能力について、動物的知能を比喩としてカテゴリー化することは躊躇われることだろう。生命の事の成り行きを純粋に抽出するには植物的生命について考察するのが適しているように思える。根は根だけにあるものであって、どこにも依存しない頭や手足などの独立した部位に生得的な知能が宿るなど考えてはいけないのかもしれない。それこそが蛸の「テロリズム」だ。皮肉なことにアインシュタインが時空を軟体動物に比喩したことを思いださせる出来事が起こっている。蛸は空間に対して極めて神経質で、カメレオンのように表皮の色素を化学変化させて一秒足らずで外的世界に擬態する。それは一般にニューロンは脳にある組織だが、蛸の場合は全身に分布していることがそのような素早い自己変態を可能にしていると言われている。しかし、だれが見ても目前の危機がない状態でも、遊ぶように色を変化させる個体もいる。カンディンスキー（ジャイアント・カトルフィッシュ）と名付けられた彼の、その生得的に獲得した能力についてどう考えればいいのだろう。解剖学的には色彩を認識する能力を有していないのが証明されていて、人間と同等の感性による色彩物語はありえない。

◆雨電柱

中嶋康雄

あんなに激しい雨の中
電線は邪魔だから
毟り捨ててしまったら
もう電柱ですらなく
のっぺり突っ立つ
ただの棒だ
ただの棒の居場所は
どこにもない
そのことは
捨ててしまってから
気づいたけれどもう遅い
やけくそで
安い安い料金の
おんぼろカラオケボックスで
歌い狂った後
波間が恨む
どこにもない
その居場所
それでもあってほしい
そのどうしょうもなさが
広告チラシの貼られた恥部で
うずく昼下がり
立ち飲み屋で酒を飲む

「背が高いなあ」
隣りの元道路が
黒い顔で言うので
酒を一杯奢ってやる
薄暗い
もうとっくに雨は止んだし
波間も滅んで
喉が渇くので
久しぶりに空を見上げる
あんなに馬鹿だったカラスが
同情を寄越すので
カラスになれませんかと
尋ねてみると
堰を切ったように笑われる
骨をぶつけられる
なんの骨だかわからない
死んだ数だけ
骨が増え
どこまでもあるだけの
果ての骨
もう燃えてしまいたい
ただの棒だから
かけらすら残さず
灰になり
やっぱりその辺を
さまようだろう
それじゃあ
今とあんまり変わらない

◆月のざれごと

大橋愛由等

木綿でできた仮面が歩いている
前後には点描が拡散していて
五色が喪失したままの日常
左脇には山に棄てられていた風をかかえ
今日かすれ雲がかかった
連山の稜線をぼんやりみつめては
沢をわたる途中で歌い出す
陽気だけれど外れた音程
にじりよる蝶は逃げていく
甘い水が好きではないらしい
「き」と発音しようと唇をうごかし
そのままの唇の形にしていると
乾きがいやまして襲ってくる
鳥たちは異端の羽音を目ざとく見つけ

異端を許さない
異端は鳥であり蝶なのだが
旅人になりきれない今日と明日
明後日にむけて帽子を選び
スタンドカラーの黒を選び
空は無謬にかすむばかりで
いかなるコンパスも作動せず
緑陰から目覚めたばかりの
かなしく哀れな風音を聞き逃すまいと
与えられた四角のすみまで歩いて
捜そうとしている誰かとは
口笛を吹いている風狂のひとと
事実しか掲載されていない偽書なのだろう
「帰ってきたの」と追放された
更地ばかりの土地からいたかも
その人は甘い水を求めたのかも
「き」とまず語りたかも
月の戯言が聞こえる川向うまで
わざわざ出かけては
そのひとが失踪した一か月を
仮面とともに詰問しようか

それともタルタ・デ・サンチェゴを
注文するために西に向かって
楚々と歩き出してみようか
ひとつひとつの声が
ひとつひとつ甦ろうとしているのは
この街もかなたの街も
いまある地と風とを響かせて
群れ語りをしようとして
しぼりだすように語るのだけれど
川向うの月の戯言と
混信しているなどと
機能不全を言い訳にしようなんて
言い出しかねない
帰ってきたその人は
なに食わぬ顔で更地の物語を
ひらかなばかりで
仮面にむかって語りだしては
異端であることが
風に溶ける刻まで
青い枯れ木のごとく
立ち尽くすつもりなのだろう

◆巨人の食卓

野口　裕

消化器官の頑丈な者に腐敗と発酵の区別はなく
バクテリアのなした廃棄物をただ黙々と咀嚼してゆく
元素の種類は幾許か、しかし無限の量があり
分かちがたき結合を解きほぐしつつ
いくつかの無心の塊として差し出せば
味蕾は虹の濃淡をより分けて、ああこれは離別の悲哀
これは邂逅の驚喜、あれひょっとして偽計の闖入
もろもろ取り込んでまたひとつ大きくなる

哲学はしばしばどうしようもない矛盾にぶつかる
禅の公案はそれを寓意として、解答はない
ないけれども発語せねばならない
そのための気力を巨人の胃袋は生みだす

何もかもを食らい尽くすブラックホールが
なぜか無限の質量を撒き散らし
矛盾はない
すべて順調とのたまう朝のニュースみたいなものだ

コンビニエンスストアで買ったマスクを着けて
縦長レシートの裏に横書きでこれを記している
あと数行で余白が埋まる
最後に何を書こうか
それともレシートの表に回ろうか
ああやっぱり回ってしまった
巨人がデザートを欲しがるように
ブラックホールは
エンディングを
書きつけてほしそうだ

なにもかも食い散らかして撒き散らす残骸なる語を味わい尽くせ

◆崩壊ソネット

大西隆志

水源に向かう川に沿って谷間を縫う
西の稜線がはっきりとしてくる短い時間
一瞬の永遠にとらわれて重なる杉が傾きはじめるようだ
ないものはあるものに、あるものはない

ガルバリウム鋼板の建物が降り立ったのはいつか
山奥の集落での湿度に反応したわけではないようだ
室内灯は光り輝き蜂の巣の様相だが人の気配はないようだ
崩れる山容の直立までのラビリンスの罠なのか

小耳に挟んだのはバランスをとる精神のペン先の危うさ
ゲシュタント崩壊を訴えてくるコロニーのなかの暮らしのようだ
世界はつねにゆっくりと西に、東に動いていく

重なる蜜蜂の巣箱へと攻撃を仕掛ける雀蜂はうようだ
密になった微動で伝播する熱に殺られてしまていく
高熱の先には死を恐れる言葉の命名にかかっ

◆商売　詠

岩脇リーベル豊美

土に戻るは四つ　数千骨壺カタログの森
春靴買いたし　オンライン映えメーク優先
売れ残りの聖夜飾りか　ＦＦＰ２マスク
利他主義禍　小包送りたいだけなのに
麦酒より水高い国ないと　白昼夢
都市封鎖解除までに産む　イースターエッグ
傷もの割引き　棚を黄に塗る
聖なる諦めの水　失業手当て尽く
起業に破戒と栄誉　名残りの雪
嫌われしジャズ喫茶の紫煙　映す酒
如月は　死者の数だけ鐘をつく

◆益田っこ通信　56号

元（はじめ）正章

▼あなたは良い人でなくてもよい　〈2021.02〉

2月14日午前6時、いつものように目覚めて、ラジオのニュースを聞く。前夜11時ごろ、東北地方でまた地震が発生したとのこと。これが震度3、4であれば、聞き流してしまうのだが、6強という数字に、仰天する。その被災状況を想像するだけで、悪寒が走る。不幸中の幸いか、津波の心配はないとのこと。この日、おだやかな春日和の下、隣の公園では、子供たちの明るい声が響いている中で、いつものように、何事も起こらなかったかのごとく、礼拝を守っていた。

「天災は忘れた頃にやって来る」とは、寺田寅彦の名言ではあるが、彼はこうも言っている。「文明が進めば進むほど天然の暴威による災害がその激烈の度を増すという事実である」。新型コロナウィルス感染の災厄の只中にあって、その感を強くする。「太陽の下、新しいものは何一つない」と、「コヘレトの言葉」が嘆くのも、決して故なきことではない。世のすべて、成るようにしかならないということは、「なんとかなる」ということにも通じているのではなかろうか。そこに想像力と信仰心が働くのであれば。

アメリカの現代詩人メアリー・オリヴァーの詩「野生のガン」の一節 Whoever you are, no matter how lonely,the world offers itself to your imagination— あなたが何者であろうと、またどんなに寂しくとも、世界はそれ自体、あなたの想像力に委ねられている。だから、「良い人でなければならないことはない」「あなたの絶望を語ってください」と、詩人は勧める。自分自身を大切にするためにも。

〈編集部註／この「益田っこ通信」は、島根県益田市にある日本基督教団益田教会の牧師である元正章氏（神戸市出身）が月間で発信しているハガキ通信を転載したものです〉

連載小説

海猫堂店仕舞記②

千田草介

「おまえ、さては五年のうちにずいぶん智恵をつけたな」と私が言うと、チャンドラは顔を洗いながら「あたりまえや。猫と人間の時間は四、五倍速度がちがう。わしはもう、おまはんより年嵩や」と、うそぶいた。

私が目当てとする海事関係の資料本はそのあたりにあると猫が指し示した。見ると、ガラクタの山に本が地層のように積み重なって露出している一角があった。

「震災のときに三宮センター街の後藤書店から吹っ飛んでまぎれこんできた本棚や」と猫が言った。「いや、棚と呼べるようなシロモノやないな」

もう店じまいしてからずいぶん年月がたつが、大震災のずっと前からたびたび足を運んでいた老舗古書店である。店のなかは、床にうず高く平積みにされた未整理の本が石垣のようにびっしりと占拠していて、私はその雑然たる本の山のなかをさまようのが、ことのほか好きであった。震災では目も当てられない惨状を呈したにちがいないが、再開した店に行ってみると、断捨離をされたごとく平積みの本の山は消え、きれいに整理整頓がゆきとどいていて、その変貌ぶりに、かえって拍子抜けしたものであった。

チャンドラにそう言われてみると、たしかにその一角にはかつての後藤書店の匂いがただよっているように思える。

「おまえ、震災のどさくさにまぎれて、くすねてきた本とちがうんか」

「わしは泥棒猫やない！」チャンドラは総身の毛を逆立てて言った。「せどり屋やあるまいし、こないな重たいもんを仰山、わしが担いで、えっちらおっちら歩けるわけがなかろう。本のほうから勝手にここへ身を寄せてきたんや」

あの阪神淡路大震災は、純正な地震ではなく〈時震〉をも伴っていた、すなわち時空に断層が走って歪む現象だった、この店の場所はその〈特異点〉と称すべき要の位置にある、とチャンドラは言う。「いわば天秤の支点や。ここが神戸の時空間のな、きわどい支えになっとるところなんや」

「看板も出してないが、この店は、屋号はないんか」

「そやな。海猫堂……とでもしとこか。ひらがなの〈うみねこ堂〉という古本屋が近くにあるけどな、うちのほうは古本専門やない万事屋（よろずや）やしな。漢字でなら、まあよかろう。元町の海文堂からも本が避難してきて今も居座っとるやろうから、品ぞろえはうちのほうが一枚も二枚も上のはずや。おまはんが知りたい海のことなら何でも調べられるしわかる。空のこと、飛行機のこともな」

（つづく）

海の見える丘②

高木敏克

連載小説

2　軌道

火の用心の見回りの時、狼山がやがて消えるという噂が耳に入ってきた。神戸電鉄という新開地と有馬温泉をつなぐ鉄道会社が、西に延びてこの神撫の地をぬけて須磨浦で山陽電鉄と繋がるという曖昧な話を大人たちは嬉しそうにしていた。少年探偵団もいち早くその調査に駆けつけなければならないと思った。果たして山あり谷ありの神撫の地にどうやって線路がひけるのか、大人たちは楽しそうに話し続けていた。少年少女たちはその鉄橋という言葉に感動して「かんなで鉄橋」「まるやま鉄橋」とか空中に煙を吐く機関車を想像したが、「電車に決まってるやろ」と隣の敏彦ちゃんに言われてがっかりした。

やがて、これは単なる噂ではなく電鉄会社と市役所が調査を始めているという情報が流れ始めた。彼らが目を付けたのが隣の堀田家で堀田氏は先祖から受け継いだ山地の所有していた。

「ああ、なるほど。そやから、あの人ら町から昔の家に帰ってきたんや」と母が言った。隣の堀田さんの家にはおじいさんとおばあさんしかいなかったのに、敏彦ちゃんと千鶴子ちゃんがお母さんと一緒に帰ってきた。

「お父さんは？」とわたしは千鶴子ちゃんに聞いた。

「お父さんは、若いお姉さんと町に残ってる」と千鶴子ちゃんは答えたが、千鶴子ちゃんにはお兄ちゃんしかいないはずだった。

そのうち、背広を着た人が何人も鞄を抱えて堀田さんの家の前に立つようになり、ペコペコ頭を下げながら家に入っているところを見た。

「やっぱりなあ」と母が言った。

「なにがやっぱりなん」

「あの一緒に入っていった一人が千鶴子ちゃんのお父さんや」

「久しぶりに顔見たわ。マラソンの選手やで、そやから市民グランドで練習してて、ここにはおれんのやろ。それに・・」

と言いかけて、母は話すのをやめた。わたしは気を取り戻して狼山を調べるしかないと思って仲間を集めた。

やってきたのは堀田さんの千鶴子ちゃんだけだった。それならと、狼山に連れ込んで怖がらせたら白状するかもしれないと思った。

「あのなあ、あの山の上に電車の駅ができるねんて、狼駅や、見にいこ」

「そんな駅つくって誰が乗るん。それに狼駅やったら駅降りたら狼に食べられると思われるわ」

「ほんでもな、電車の駅ができたら新開地の劇場にでも映画館にでも、すぐ行けるやんか。目的地はこことちゃうで、新開地やで」

「ほんなら、神月一家のお芝居も観られるで、光兄さんの踊りもええしな」

当時の神月一家はまだ半分農家でもあり、農閑期に始めた夢芝居が新開地で人気になっていた。中でも長男の神月光はブロマイドにもなって老人と子供たちのアイドルになっていた。もし、東西に山麓鉄道が貫通したら、惣町の景色どころか港町全体の景色は一気に港の劇場のようになるだろう。

列車からも海が見えて、海岸通りと山麓通りがリボンのように須磨浦と新開地でつながるだろう。少年少女探偵団は列車の旅に出るだろう。

神月一家の光にいさんの女形姿や虚無僧姿をいつでも見られるようになるだろう。ところが話はそう簡単には進まなかった。

海に近づけば近づくほど海は見えなくなるので三宮の街に出るといつも不安になった。

思いっきり近づいてメリケン波止場の端までゆくと海は顔色を変えて恐怖の深みを見せた。墓場の色の厚化粧でホテルは震え、母のモダンな化粧もひび割れて見えた。

わたしが最初に一人で街まで降りたのは幼稚園だった。幼稚園は長田神社の宮川の対岸の教会にあった。わたしは宮川に掛かった橋から突き落される恐怖に襲われた。

幼稚園に入るにはその橋を渡らなければならないが、落されることもあるからはっきりと返事をする良い子でなければならない。先生は何でも知っていて家の中でもいい子にしていないと落される、と祖母が言った。わたしはたぶん何人もの先生に担ぎ上げられ、ラクダーイといって放り投げられる。ワハッハワハッハと先生たちの歓声が聞こえる。わたしは川の底まで叩きつけらてドザエモンのように海まで流れていく。幼稚園に入ると正面に磔になって死んだ裸の男が居て、うなだれてびくともしない。恐る恐るその前に行くときには十字架をきり、「天なる父よ」と挨拶しなければならない。逆らうとその男にように磔になるかもしれない。わたしは門をたたかずに迷いこんだ異教徒だった。耐えられなくなったわたしはすぐに幼稚園に行くのをやめた。

闇の中にまっすぐなネオンサインになった十字架が輝いていた。天と地と海の創世記の話は園長先生が聞かせてくれた。十字架の横線は天と地を分け、縦線は空と海をつないでいる。幼稚園は世界が生まれる前の闇の中にたたずんでいる。十字架はむしろ闇の中の孤独のシンボルにしか見えない。夜中の幼稚園にはきっと誰もいない。ぎっしりと闇だけが詰まっていて外気の闇とつながりカオスにしか見えない。

いつの間にか弟がついてきていた。

「ぼくは幼稚園に行きたいのに」と、あいかわらずわたしの背中に張り付いたまま言った。

影法師の弟はこれからどんどん大きくなって、わたしと入れ替わろうとするだろう。影法師だと思っていると、次第に闇の塊の肉体となり、わたしの生活を食いつくそうとするだろう。

弟と入れ替わってわたしは弟の奴隷になり金を稼ぎ続けるだろう。わたしはつまるところ闇に支配されるのだ。弟は何もできなくて、何もしないうちにわたしを支配してわたしを影法師に変えてゆきたいのだろう。何もできない者が何でもできる者を支配する世界の構造は変わらないだろう。あちらでもこちらでも影法師が人間を支配しようとしている。弟も結婚して家庭を持ち子供もたくさん作り権力を持つだろう。背後の山々の闇も決して姿を表さないままわたしに張り付き続けるだろう。

幼稚園に入る頃、闇の中の十字架と影法師の弟以外にもう一つ怖い存在があった。隣の家に住んでいて、インディアンの奇声を発する堀田敏彦だった。新開地で西部劇を見てきたこのお兄さんは何をするかわからない隣人で、彼の空気城でわたしの家の雨樋は穴だらけになっていた。その上、銃口をこちらに向けるので悩みの種だった。みんなは敏彦ちゃんと呼ぶが僕には「酋長と呼べ」とのしかかるようにいった。

わたしの家の前はなだらかな坂道なのに、隣の家とはかなりの段差があり、その石垣の上から堀田敏彦はこちらに向かって話しかけたり、弓を放ったり空気銃を撃ってきたのだった。全て威圧的な隣家であったが、不幸もあった。堀田家は敷地の中に井戸を掘っていたが、ある年の大雨で三人兄弟の中っ子が井戸と一緒に土砂に埋まってしまったのだ。そのため敏彦と千鶴子は歳が離れすぎていた。わたしは死んだ中っ子と同じ歳なので千鶴子から慕われていたのだと思う。しかし、敏彦はわたしのことを弟のようには思っていない。石垣の下の家来だと思っていた。

「インディアンの冠を作るので鶏小屋から白い雄鳥の長い尻尾を抜いてこい」

と言われて時盛さんの養鶏場の前で尻尾の羽が自然に抜け落ちるのを待つしかすべがなかった。時盛さんの家には女の子が一人だけいて、眼鏡を掛けて本ばかり読んでいた。わたしが鶏小屋でしゃがんでいても窓の中から一度こちらを観ただけで目を伏せてしまった。

雌鶏の短い尻尾を渡して、なんとか友好条約を維持したわたしだが、雄鶏の尻尾じゃなかったので、空気銃や弓矢の標的にもなっていた。

祖母は撃ち抜かれた雨樋から雨水がシャワーのように出るのを見ながらつぶやいた。

「やっぱりそうか、新開地は悪の花みたいなものや。ターザンの映画やらインディアンの映画やら夢か現かわからんようになるんやろな。この辺りの子供はみんな気狂いみたいなものや」

「キングコングの映画もあったで」弟がつけ加えた。

その数日後、大顔で泣き叫ぶ声に驚いて窓を開けると、堀田敏彦は血だらけになって、タクシーに乗せられていた。

半日後、母と一緒にいるところに、包帯をぐるぐる巻きにして白いミイラになって帰ってきた敏彦を見た。

「どないしたん」と聞いても何も答えなかった。

「聞いてください。この子はインディアンの格好で焚き火に上を飛び跳ねているうちに、いよいよ興奮して、縁側のガラス障子に裸で飛びこんだんですよ。西部劇を見るとこうなるんですよね」と敏彦ちゃんのお母さんが言った。

母は何も答えようがなくて、代わりにわたしの顔を眺めていた。わたしは答えるしかなかった。

「敏彦ちゃんは、ほんまにアホやと思う」

「気いつけよ」と母が言った。

それからは、新開地には父とは行かず、甘いフランス映画を母と見るようになった。

神戸詞（うた）あしび

147-2021.2.28 大橋愛由等

読書を進めていくと、一見して関係のない項目がひょいと結びついてしまうことがある。

去年あたりから気になっていた思想ジャンルがある。「スペインの神秘思想」である。『新プラトン主義を学ぶ人たちのために』（世界思想社、2014）を手に取り「近世のスペイン神秘主義」（鶴岡賀雄）を注目して読んでいくうちに、16世紀に生きたスペイン出身の異端神学者を知ることになる。

スペイン名はミゲル・セルベト（Migel Serveto1511～1553）といい、フランス名のミシェル・セルヴェ（Michahel Servet）の方が知られている。

セルベトは『七つの書物における三位一体説の誤謬』（1531）という小冊子を上梓して三位一体説を否定する。〈父〉と〈子〉と〈聖霊〉という三つの位相がキリストの主要属性として一体であるとする教説は、カトリックはもちろんのこと、当時、宗教改革の狼煙を上げていた新教側も容認していたため、セルベトは旧教・新教の両方から激しく攻撃され異端視された（セルベトはこの三位をそれぞれ別の実相として捉えていたようである）。

まず旧教のカトリック側がフランス・リヨン近郊のヴィエンヌ市でセルベトを捕らえ収監し有罪判決（火刑）をくだしている（1553）。この時はカトリック側にセルベトの理解者がいたため脱獄して難を逃れていた。犯人が逃亡したため、彼の似顔絵と蔵書五箱がかわりに、ラ・シェルニエール広場で火刑に処せられたという興味深いエピソードが渡辺一夫によって紹介されている（『フランス・ルネッサンスの人々』岩波文庫、1992）。火刑の代替として焚書が選択されたことに注目したい。

セルベトの教説を徹底して嫌悪していたのが、新教側のカルヴィンだった。「1546年までセルヴェは先輩カルヴィンに約三十通の書簡を送り、自分の求道生活について、また洗礼・聖餐についての意見を質（ただ）したり」（渡辺）、あるいはカルヴィンの著作についても異見を書き送っていた。どうやらそうした内容がカルヴィンの逆鱗に触れたようだ。「もしセルヴェにしてジュネーブに潜入すれば、断じて生きてはこの地を去らすまい」と知人にあてた手紙にカルヴィンは書き記しているほどである。

尹東柱詩碑（京都・同志社大学）

セルベトと尹東柱をむすぶ〈贖罪の碑〉

1553年、イタリアに向かう途中にジュネーブに立ち寄ったセルベトだったが、この都市を根城としてカトリック側に激しく対立していたカルヴィンが見逃すはずはなく、セルベトを捕らえ、この地で火刑に処してしまうのだ。

この処刑は多くの非難を招いた。オギュンスト・ディードは「宗教改革のなかにある悪寒を起こさせるような、いらいらさせるような、暴君的なものの一切が、カルヴィンにある。十六世紀の宗教改革のなかにあり得た暫時の間でも持続しうるすべてのものは、セルヴェのなかにある。そして、これらをすべて、カルヴィンはシャンベルの火刑台にゆだねたのである。」（渡辺）と皮肉っている。

1903年、カルヴィンの末裔たちは、ジュネーブ・シャンベルの丘にセルベトの火刑に対する「贖罪の碑」を建立した。この件りを読んだのが、第8回「日本・韓国・在日同胞詩人共同 尹東柱詩人追悼の集い」の前日であった。明日わたしが向かおうとしていた尹東柱の記念碑は、詩碑であると同時に、若く有為な詩人を獄中死させてしまった「贖罪の碑」であるだろうと強く思ったのであった。

詩と評論
月刊「Mélange」Vol.159
神戸

2021年2月28日　通巻159号
発行所／月刊「Mélange」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等
maroad66454@gmail.com
定価 600円(税別)